

シンポジウム・アジアの価値観と民主主義における安倍晋三日本国総理大臣の挨拶
平成30年7月5日

1.

皆さん、こんばんは。安倍晋三です。

「アジアの価値観と民主主義セミナー」の閉会にあたり、一言、ごあいさつ申し上げます。

本セミナーも、今年で4回目です。みなさんと共に、継続をお祝いしたいと思います。

極めてユニークな、議論の場です。世界的に、いや歴史的にも、本セミナーには類例が見当たりません。

インドのナレンドラ・モディ首相が、4年前の秋、訪日された際、私との共同提案で、始まったセミナーです。

モディ首相は、今回もメッセージを寄せてくださいました。

セミナーの継続を喜ぶ気持ちは、モディ首相も私も、同じであります。

2.

本セミナーを始めた動機を、振り返ってみます。

人類史上、最大規模の民主的選挙を定期的を実施する。結果を毎回、着実に、定着させる。

そうやって今日に及ぶ国、それが、インドです。

私はそのことに、常々畏敬の思いを抱いてまいりました。

それでいて、モディ首相は、民主主義とは、おいそれとは育たないことを、弁えておいでです。

その点の認識も、私は同じでした。

民主主義とは、成長するのに何十年、というより、何世代もかかるわけであります。

日本にとって本年は、「明治維新150周年」であります。

150年前、新しい国をつくるに当たって、ときの天皇陛下がなされた五箇条にわたる誓いの第一項が、「廣く會議ヲ興シ萬機公論ニ決スベシ」でありました。

以来今日まで、私どもは、私どもの民主主義を、作り、育て、さまざまな試練と直面しながら、思えば果てしのない、歩みを続けてまいりました。

民主主義とはまるで、成長するのに長い時間がかかる、樹木のようなものではありませんか。伸びるには、地下深く、根を張らないといけません。

また、ファスト・ファッションのTシャツではありませんから、民主主義を、棚からもってくることもできません。

サイズからデザインまで、誰が着ても、そこそこ似合うという民主主義は、この世で手に入らないわけであります。

すべての民主主義は、国柄にあったテイラー・メイドでないと根つきません。

また根づくには、大変長い時間がかかります。

それでも、究極において、民主主義に替わる制度は存在しない。

それならば、アジアの各方面から少なくとも年に一度、それぞれが考え、あるいは悩む、民主主義の育て方について、知見と経験を持ち寄る場があるといいのではないか。

本セミナーの着想は、そこから生まれました。

西洋渡来の、外来種でない民主主義。翻訳ではなく、土着の言葉と思想で語られる民主主義。

それはどんなものか。議論を続けていきたいと思いますというわけでした。

3.

自分たち自身の民主主義を、どう育てるか。

そのための課題は、国によって、時代によって、いろいろです。

ひとつ、いつ、いかなる場合にも確かなことは、民主主義の土台は、人の心に育つことです。

いま、民主化を進めるミャンマーで、小学校教科書の、全面改訂が進んでいます。

子どもたちの心に、早いうちから、自分で問いを立て、解決をさぐる力、つまり、考える力を養いたいと、ミャンマー政府の方々はお考えになった。

これを私は、民主主義を育て、よいものにする努力をになう、未来の人材づくりに等しい事業だと受けとめました。

そのように考えて、厳粛な思いになりました。

教科書全面改訂の仕事に、日本のJICAを通じて、日本の専門家が、何人もヤンゴンへ行っているからです。

何年もかけて、ミャンマーの教育者たちと一緒に、働いているからであります。

明治150年、日本は、アジアの国づくり、民主主義の土台づくりの、お手伝いができています。

これを知ったなら、明治の世を開いた泉下の先人たちも、さぞ、報われる思いを抱くでしょう。

日本がこれからもそんな信頼を得られる国であるように、努力を続けていきたいと思えます。

4.

本日ここには、前田専學教授はじめ、東方研究所から、専門家の方々が参加されています。

私は、故・中村元先生のお仕事、先生自ら始められた東方研究所、東方学院を通じ、新たな世代に伝えられておりますことを、まことに心強く存じます。

なんでも中村教授は、サンスクリット語、パーリ語、チベット語、英語、ドイツ語、ギリシャ語、フランス語のすべてに、通暁しておられた。

お書きになった著書・論文の数は、日本語で1186点、英語など欧文では、300点ほどだと伺いました。判明した限りで、なのだと承知しております。

驚嘆すべき業績であります。私は、このように偉大な、巨星というべき碩学と、せめて同時代の空気を吸うことができましたことを、誇りに思います。

そのお仕事の中には、仏教や、インドの思想が説く「慈悲」について、深くお考えになったものがあります。

「慈悲」には、サンスクリット語の語源として、「カルナ」のほか、いくつかあるそうです。

「コンパッション」、などを、英語の訳として当てている。

先生の説かれるところ、「慈悲」を尊ぶ思想の根っこには、自分と他人は、違わない、同じなんだという考えがある。

上下の差、優劣などはもとよりない。絶対者がひとり突出し、その前にあつての平等というのでもない、もともと、みなが同一、平等である。

そういう人間観があつての「慈悲」なんだと、それが、私などの理解しますところ、中村先生のお考えのようであります。

明治維新を推し進めたのは、当時の若者です。ほとんどが、サムライでしたが、武士としては恵まれない、下層の出でした。

あなたも、わたしも、みな、同じ、という発想を、彼らなら、自然にもつことができたでしょう。

それが、一人一票を原則とする議会の開設へと、変革のうねりを向かわせていったと、そう思えるのです。

「貧しきを憂えず、等しからざるを憂う」という、近代の日本に脈々と流れてきた私どもの感情も、ここに、ひとつの源を見出すことができるのでありましょう。

ことほどさよう、民主主義を育てる滋養も、ミネラルも、アジアの土地に、いろいろと含まれていそうに思います。

そこに光を当て、私たち自身の自覚を促していく本セミナーの、本年の成功にお祝いを申し上げ、次回以降、議論がさらに深まりますことを祈念して、私からの挨拶といたします。

ご清聴ありがとうございました。